

聖書:ルカの福音書10章1~16節

説教:収穫は多いが、働き手が少ない

はじめに

ここには、主が七十二人の弟子を遣わしたことが書かれています。いつものことですが、疑問がいくつもあります。どうして財布ももたず履き物も履いてはいけぬのか。どうしてあいさつもしてはいけぬのか。そしてまた、イエスがいくつかの町を名指して厳しいさばきのことを語るのを読んでいるうちに、もしかして自分もこの中に入っているのだろうか、だんだん不安になってくる。このところをどう理解したらよいのか、混乱してしまうのではないのでしょうか。

そこで今日は、こういうわかりにくいところを読むときにはどうしたらよいか、勘所と言うのでしょうか、ポイントを最初に挙げ、それから実際に今日のところを見ていくことにします。

1 聖書を読むときのポイント

1) 厳しいところにこそ恵みがある

聖書を読むときのポイント、今日は二つ挙げます。一つ目。「厳しいと思えるところにこそ恵みがある。」

聖書にさばきのことが出てきたとき、皆さんはどう読んでいたでしょうか。これは私のことではないと思ってやり過ぎか、見なかったふりをするか。でも厳しいことばの中に、実は恵みがある。こう言うと皆さん驚くでしょう。どうやったらその恵みが見えてくるのでしょうか。そのことはこのあと見ていきます。

2) 厳しいところにこそ主がおられる

聖書を読むときの二つ目のポイント。「厳しいところにこそ主がおられる。」

昨年でしたが、コロナで緊急事態宣言が出ていたときに政府の高い地位にある方が深夜まで外で食べたり飲んだりしていたということで辞職したというニュースがありました。みんなに自粛をお願いする立場にある政府の議員が、陰でこっそり遊んでいた。こんなことをしたらだれでも怒るわけです。

イエスはどうか。どこかの議員のように、表では厳しいことを言っておきながら、陰では自分だけ安全なところに立って、まったく関係のないふりをしているのか。もちろんそんなことはなく、厳しいことを言われたのなら、主は逃げずにその厳

しきの真ん中にどんと立ってくださる。これが二つ目のポイントです。

そのような方であることを覚えながら、大きく三つの疑問を取り上げます。

2 疑問

1) 働き手とはだれか

まず一つ目は2、3節。「そして彼らに言われた。『収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主は、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。さあ、行きなさい。いいですか。わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に子羊を送り出すようなものです。』」

ここに出て来る「収穫の主」ですが、その方に祈りなさいということですから、これは父なる神のことでしょう。収穫をなさるのは父なる神であると理解することができます。

では収穫の主に送って欲しいと願う「収穫のための働き手」。これはだれのことか。「献身者が起こされるように」と2節を引用して祈るのを聞いたことがあると思います。ですから、牧師、伝道師、宣教師のような献身者と呼ばれる人たちのことだと考えて間違いない。ちなみに北海道聖書学院は、この4月に本科の入学を希望されている方は現時点で二名おられると聞いています。少なくとも五名の方が与えられるようにと祈っていましたから、確かに「働き手が少ない」と感じます。

でもここで言おうとしているのは、献身者が少ないということだけなのか。というのは3節が引っかかるからです。

2) 狼と子羊とは誰のことか

次に二つ目の疑問。3節。「わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に子羊を送り出すようなものです。」「赤ずきんちゃん」というグリム童話があります。この世の中には悪い狼が純真無垢のかわいい子羊を食べようと狙っている。だから気をつけなさいと注意している。そんな場面を想像します。だから「道であいさつしてはいけぬ」とも言われるのだろうか。しかし、そんなに危ないところに出かけて行くというのには、財布も持つなと言うのは奇妙です。狼に襲われても大丈夫なように財布は持つべきではないのか。履き物を履かない「はだし」では、いざとなったときに逃げるの

は難しい。いったいどういうことかと戸惑ってしまいます。

そんなふうにはわからないことがあるいっぽうで、わかることもいくつかあります。9節。「そして、その町の病人を癒やし、彼らに『神の国があなたがたの近くに来て』と言いなさい。」たとえ町の人たちが受け入れなかったとしても、「神の国が近づいたことは知っておきなさい」と言うことだけは忘れずに伝えなければならぬ。これが彼らの最重要使命だったというわけです。

3) カペナウムへの厳しいさばき

そして三つ目の疑問。イエスは13節で、コラジン、ベツサイダ、そしてカペナウムの名前を挙げて、さばきの日のことを語り始めます。いずれもガリラヤ湖周辺にある町の名前です。そのなかの特にカペナウムは、シモン・ペテロを初めとして何人もが弟子となり、数々の奇蹟が行われた場所です。それだけのことが行われたのですか、当然カペナウムは救われていいはずなのに15節。「カペナウム、おまえが天に上げられることがあるだろうか。よみにまで落とされるのだ。」

これは非常に戸惑います。カペナウムでさえダメだというのならいったいだれが救われるのか。だれも救われないのではないか。それだけ厳しいことばに聞こえます。

3 イエス

1) 収穫の主と働き手

今三つの疑問点を挙げました。これをどう理解するか、最初に挙げた聖書を読むときのポイントを駆使しながら説明します。

まず収穫のための働き手とはだれのことか。こんなことを言われる以上、何かイエスに関係しているのではないか。そういうあたりをつける。

問題をわかりやすくするために、こういうことを考えてみます。もしイエスが十字架におかかりにならなかったらどうなるだろうか。収穫はあるのかなのか。そう考えてみる。答えは簡単です。十字架を通して私たちは初めて神の国に入ることができるのですから、もし十字架がないとなれば神の国に入れない。つまり収穫はゼロになる。そうすると、もっとも必要で絶対に欠けてはならない働き手はだれか。イエス・キリストです。ここはご自分のことを含めて語っていたことになる。

そう考えると、2節後半の意味はどうなるか。「収穫の主に、ご自分の収穫のために働き手を

送ってくださるように祈りなさい。」ということ。あなたがたが収穫されて、神の国に迎えられるように、十字架にかかる者を与えてくださるよう祈りなさい。言い換えれば、イエスが十字架にかかるように、あなたがたは祈りなさい。そう言っていることになります。

2) 子羊キリスト

では3節の狼とはだれで子羊とはだれか。隠れている狼の餌食にならないよう、十分注意して旅をなさよと言うのか。これも、イエスがご自分のこととして語っているのではないかと考えてみる。

そこで1節のことばを読みます。「ご自分が行くつもりすべての町や場所に、先に二人ずつ遣わされた。」その結果どうなったか、今日は読みませんが17節では、イエスの名前を唱えると悪霊どもでさえ従っていったと報告していますから、彼らはイエスがなさる働きを代わって行っていたと見ることができます。その彼らの子羊だということ。そうするとイエスは何者ということになるのか。

洗礼者ヨハネは、イエスがヨルダン川に洗礼を受けに来られたとき、この方を指さして、「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」と言いました。イエスこそ子羊となられて、世の罪を取り除くために十字架で屠られていくのです。そうすると、弟子たちが子羊のようなものだと言ってるけれど、ご自分こそが、世の罪という狼の中に遣わされていく子羊だと言っていることになる。その子羊はどうなったか。狼に襲われて十字架に追いやられていくのです。

3) アブラハムのとりなし

ではカペナウムのことはどうか。カペナウムと比較されているソドムのことを考えます。創世記の19章に神にそむいたソドムが火と硫黄によって滅ぼされたことがあります。主の御使いがソドムへのさばきのことを事前にアブラハムに打ち明けたとき、アブラハムはどんな行動に出たか覚えているでしょうか。創世記18章24節。「もしかすると、その町の中に正しい者が五十人いるかもしれません。あなたは本当に彼らを滅ぼし尽くされるのですか。その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにならないのですか。」こう言って、アブラハムはソドムの人々を救うために、マーケットで値段を値切るかのような取引を御使いとして、とうとう最後には十人の正しい者がいるならば滅ぼしはしないというところまで譲歩させ

た。その結果どうなったか。ソドムは残念ながら滅ぼされたけれど、アブラハムのおいであるロトとその家族が救われました。あのソドムで行われたことは、カペナウムでは行われないのでしょうか。そんなことはない。もう既に主はカペナウムで伝道して神の国のことばを語っている。

4) 神の国に迎えるために

ということはどういうことか。カペナウムで主を受け入れなかった人たちはさばかれる。これは避けられない。しかし全員がさばかれるのではない。主を受け入れた者は救われるのです。でも、もしそうだというのなら、救われる人たちがいるのなら、主はこんなに深刻になって嘆かなくてもよいのでは、と思うのでしょうか。

主はだれのことをご覧になっているのでしょうか。一匹の羊がいなくなれば、九十九匹の羊を置いて探しに行く方なのです。主を受け入れずに滅ぼされる人が一人でもいたら、主は九十九匹の羊をなくしたのと同じように嘆きます。救いの願いがそれほど強いがゆえに、カペナウムのことを嘆かざるを得ない。

このような主ですから、私たちをさばきから救い出すためになにもなさらないはずはない。ご自身がさばきのど真ん中に立つようにして、十字架におつきになり、ハデスに落とされます。そうやって迷った羊となった私たちを捜し出し、罪の名から救い出してくれたのです。

こうして見てくると厳しいことばの中にこそ、実は救いの恵みがあったことがわかってきます。私たちが収穫して神の国に迎えるために、この方が働き手となって命を献げてくださったことに感謝いたします。